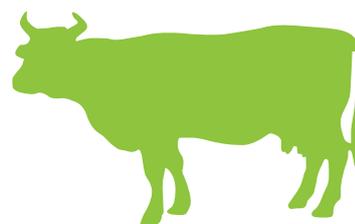


牛肉



◆飼養動向

28年2月現在の肉用牛飼養頭数、0.4%減少

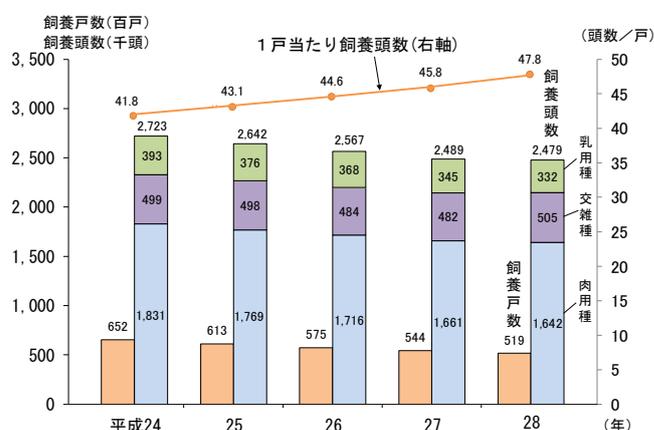
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いている。平成28年は、昭和32年の畜産総計（緊急畜産センサス準備を含む）調査開始以降、59年連続での減少となる5万1900戸（前年比4.6%減）となった。

総飼養頭数は、飼養戸数に比べ減少幅は小さいものの、22年以降減少傾向にあり、28年は247万9000頭（同0.4%減）となった。品種別に見ると、肉用種は18年以降、増加傾向で推移していたが、22年に宮崎県で発生した口蹄疫の影響などにより減少に転じ、28年は164万2000頭（同1.1%減）となった。乳用種は22年に一時的に増加したものの、23年に再び減少に転じ、28年は33万1800頭（同3.9%減）となった。交雑種は子牛価格高騰を受けた酪農家における乳用種への黒毛和種交配率の上昇により4年ぶりに

増加に転じ、28年は50万5300頭（同4.7%増）となった。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、47.8頭（同4.4%増）とやや増加した（図1）。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年2月1日現在。なお、28年は概数値。

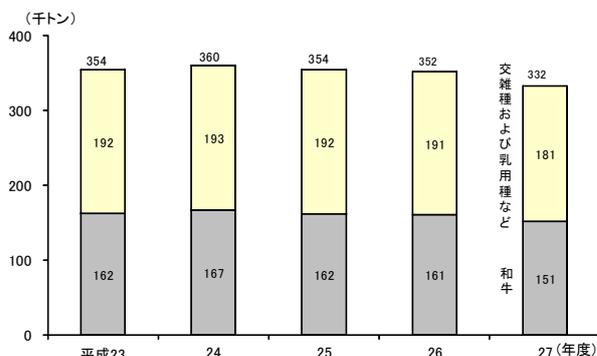
◆生産

27年度の生産量、5.4%減少

牛肉の生産量は、平成21年度以降、和牛が増加する一方で、交雑種および乳用種の減少により、減少傾向で推移してきた。24年度は、酪農家において乳用種に代えて黒毛和種との交配が進み、交雑種の生産が増加に転じたことから、牛肉全体の生産量は4年ぶりに増加した。しかし、高齢化に伴う離農の進行や22年に宮崎県で発生した口蹄疫の影響、23年8月の大規模生産者の経営破たんなどにより繁殖基盤が縮小し、25年度に再び減少に転じた。27年度は、和牛が15万1200トン（前年度比5.9%減）、乳用種が10万2200トン（同3.6%減）、交雑種が7万5100トン（同6.8%減）と全品種で前年度を下回り、全体では33万2400

トン（同5.4%減）と3年連続の減少となった（図2）。

図2 牛肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注1：部分肉ベース。
2：交雑種および乳用種などには、外国種などを含む。

◆輸入

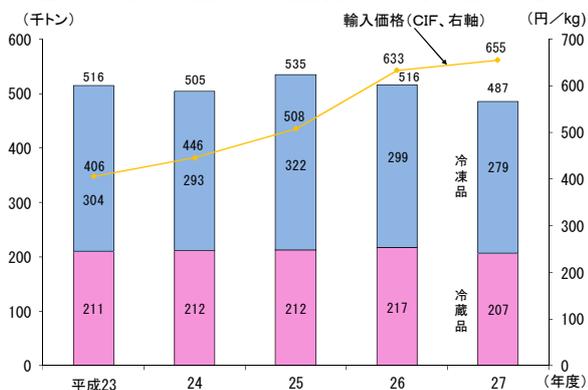
27年度の輸入量、高値の米国産から関税率削減の豪州産へ切り替えが進む

牛肉の輸入量は、比較的安価な輸入牛肉の需要の高まりなどを背景に、平成20年度以降、増加傾向で推移してきた。25年度は、外食需要の増大や25年2月の米国産の牛海綿状脳症（BSE）に関する月齢緩和措置などを背景に、53万5100トン（前年度比5.9%増）とやや増加したものの、26年度は、一部外食チェーンの業績悪化に伴う需要量の減少や為替の円安基調、米国西海岸港湾労使問題の影響などにより、51万6200トン（同3.5%減）と減少に転じた。27年度は、現地相場高や為替の円安基調などにより、48万7100トン

（同5.6%減）と2年連続の減少となった（図3）。

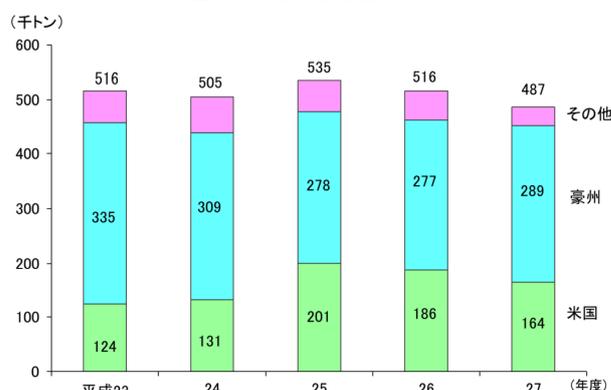
27年度の国別輸入量を見ると、豪州産が28万9200トン（同4.5%増）とやや増加した一方、米国産が16万3700トン（同12.1%減）とかなり大きく減少した。米国産は干ばつの影響による飼養頭数の減少により、現地相場が年間を通じて高値で推移したほか、日豪EPA発効2年目の27年度は、豪州産の関税率が冷蔵品31.5%、冷凍品28.5%に削減されたこともあり、上半期を中心に米国産から豪州産への切り替えが進んだものとみられる（図4）。

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格



資料：財務省「貿易統計」
注1：冷凍品にはくず肉などを含む。
注2：部分肉ベース。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

◆消費

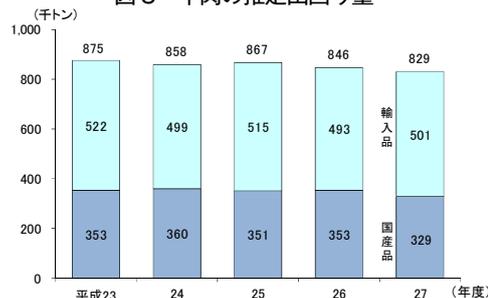
27年度の推定出回り量は2.0%減少、家計消費は2.9%減少

推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、平成25年度は、米国産の月齢制限緩和措置による輸入量の増加により、86万6500トン（前年度比1.0%増）とわずかに増加した。26年度は、一部外食チェーンの業績悪化などによる輸入量の減少により、84万6100トン（同2.4%減）とわずかに減少した。27年度は、輸入品は50万800トン（同1.6%増）と前年度をわずかに上回った一方、国産品は32万8500トン（同7.0%減）と前年度をかなりの程度下回った。全体では82万9400トン（同

2.0%減）と2年連続で減少した。生産量の減少に伴う小売価格の上昇が続いており、国産品からより安価な輸入牛肉や豚肉などに需要がシフトしたものとみられる（図5）。

図5 牛肉の推定出回り量

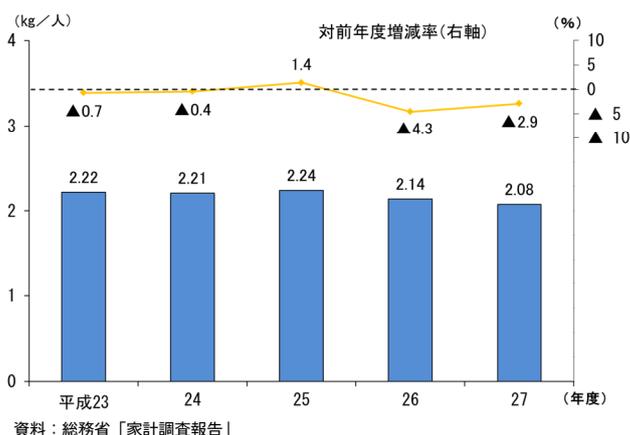


資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省貿易統計より農畜産業振興機構で推計
注：部分肉ベース。

家計消費

牛肉需要の約3割を占める家計消費は、平成22年度以降、景気低迷による消費の減退、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射性セシウム検出問題などを背景に、減少傾向で推移してきた。25年度は、景気の回復基調などに伴い、年間1人当たり2235グラム（同1.2%増）と、4年ぶりに増加に転じたものの、26年度は、相場高による豚肉、鶏肉へのシフトなどにより同2139グラム（同4.3%減）と減少し、27年度も、2年連続で3年度以降最少となる同2077グラム（同2.9%減）と減少した（図6）。

図6 牛肉の家計消費量（年間1人当たり）

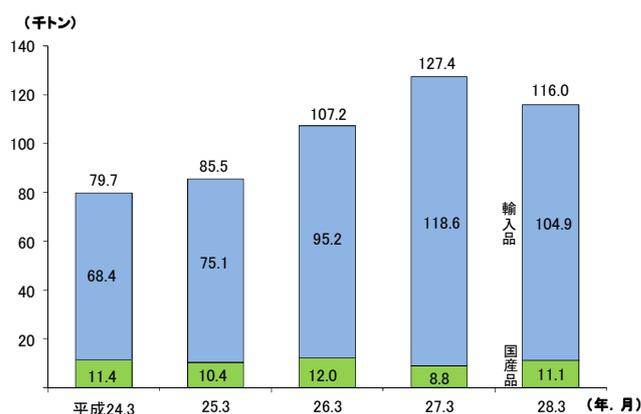


◆在庫

27年度の推定期末在庫量、9.0%減少

牛肉の推定期末在庫量は、平成25年度は、米国産の月齢制限緩和措置による輸入量の増加に伴い、全体の9割を占める輸入品が大幅に増加した結果、10万7200トン（同25.4%増）となった。26年度は、国産品が減少した一方、輸入品が一部外食チェーンの業績悪化による需要量の減少などにより大幅に増加した結果、全体では、12万7400トン（同18.9%増）と前年度に引き続き、高い水準となった。27年度は、国産品は前年度を上回ったものの、輸入品の在庫調整が続いたことから、全体では11万6000トン（同9.0%減）と前年度をかなりの程度下回った（図7）。

図7 牛肉の推定期末在庫量



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：ラウンドの関係で、合計値は必ずしも一致しない。

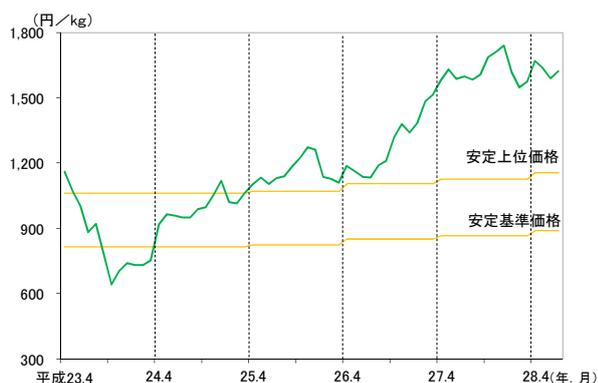
◆枝肉卸売価格（東京・省令）

27年度の卸売価格（省令規格）、26.8%高の1キログラム当たり1624円

省令規格

牛枝肉卸売価格（東京・省令規格）は、平成23年度は、放射性セシウム検出による風評被害から大幅に低下したが、その後、徐々に回復し、25年度は、生産量の減少や牛肉需要の回復などにより、1キログラム当たり1163円（同16.3%高）と、前年度を大幅に上回った。26年度以降も上昇傾向が継続し、消費増税の影響もあり、26年度は同1281円（同10.1%高）、27年度は前年度を大幅に上回る同1624円（同26.8%高）となった（図8）。

図8 牛枝肉の卸売価格（東京・省令規格）



資料：農林水産省「食肉流通統計」

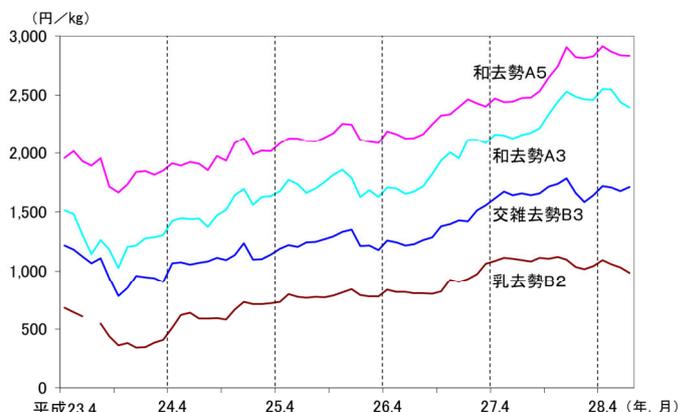
注1：省令規格の卸売価格は、去勢牛B2とB3の加重平均。

注2：消費税を含む。税率は、平成26年4月1日以降8%、それ以前は5%（以下同じ）。

和牛

和牛（去勢）の卸売価格は、23年度後半から徐々に回復し、25年度は、生産量の減少や景気の回復基調などにより、A5が同2138円（同8.5%高）、A3が同1725円（同13.2%高）と、前年度を大きく上回り、26年度も、A5が同2282円（同6.7%高）、A3が同1874円（同8.6%高）と上昇した。27年度は、全国的な出荷頭数の減少や輸入量の減少、インバウンド需要の増大、堅調な輸出需要などから、記録的な高値で推移し、A5が同2634円（同15.4%高）、A3が同2310円（同23.2%高）と大幅に上昇した（図9）。

図9 牛肉の卸売価格（東京・種別）



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：消費税を含む。

注2：23年7月の乳去勢B2については取引実績がない。

乳牛

乳用種（去勢B2）の卸売価格は、3品種の中で放射性セシウム検出による風評被害が特に大きく影響し、23年度は大幅に低下したが、24年度は同639円（同35.3%高）と、22年度実績に迫る水準まで回復した。25年度は、競合する輸入品価格が高水準で推移していたこともあり、同784円（同22.6%高）と、前年度を大幅に上回り、26年度は同875円（同11.7%高）とかなり大きく上昇した。27年度も上昇傾向が継続し、同1085円（同24.0%高）と前年度を大幅に上回った。

交雑種

交雑種（去勢B3）の卸売価格は、23年度は、他の品種と同じく放射性セシウム検出による風評被害から大幅に低下したものの、25年度は、景気回復基調などもあり、同1249円（同12.8%高）と、かなり大きく上昇した。26年度は、生産量の減少や和牛の相場高による交雑種への需要シフトなどもあり、同1351円（同8.2%高）とかなりの程度上昇した。27年度も上昇傾向が継続し、同1668円（同23.5%高）と前年度を大幅に上回った。

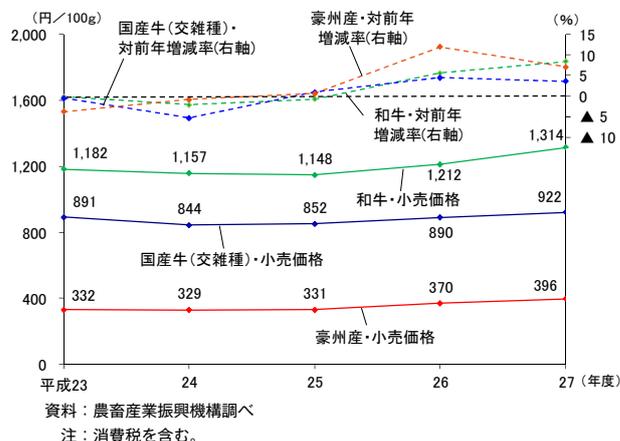
◆小売価格

27年度の小売価格、国産品、輸入品ともに値上がり

牛肉の小売価格（サーロイン）は、消費者の経済性志向の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、平成21年度以降、横ばい、もしくは低下基調で推移してきた。25年度は、和牛は100グラム当たり1148円（前年度比0.8%安）と低下傾向が継続した一方、国産牛（交雑種）は同852円（同1.0%高）と上昇した。26年度は、消費増税に加えて、相場高による価格転嫁が行われたものとみられ、和牛は同1212円（同5.6%高）と上昇に転じ、国産牛（交雑種）は同890円（同4.5%高）、豪州産牛肉は同370円（同11.8%高）といずれも上昇した。27年度も上昇傾向が継続し、和牛は同1314円（同8.4%高）、国産牛（交雑種）は同

922円（同3.6%高）、豪州産牛肉は同396円（同7.0%高）と前年度を上回った（図10）。

図10 牛肉の小売価格（サーロイン）



◆肉用子牛

27年度の肉用子牛価格、全品種とも大幅に上昇

黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引価格は、繁殖基盤の縮小に伴う出生頭数の減少などにより、平成22年度から上昇傾向で推移している。26年度は、堅調な枝肉卸売価格に後押しされ、1頭当たり57万1000円（同13.4%高）と前年度をかなり大きく上回り、27年度も、同68万8000円（同20.6%高）と大幅に上昇した。

取引頭数は、17年度以降増加傾向で推移してきたが、22年度は、宮崎県における口蹄疫発生の影響により減少した。23年度以降は若干回復基調となったものの、繁殖雌牛の減少に伴い、出生頭数が減少したことから、26年度は33万4000頭（同4.9%減）と減少し、27年度も32万2600頭（同3.4%減）とやや減少した（図11）。

ホルスタイン種

ホルスタイン種の子牛取引価格は、19年度以降、枝肉卸売価格の低下などから低下傾向で推移していたが、

23年度に取引頭数の減少により上昇に転じて以降は、上昇傾向で推移している。26年度は、子牛取引頭数の減少や堅調な枝肉卸売価格に後押しされ、1頭当たり14万6000円（同14.7%高）と上昇し、27年度も同22万円（同51.4%高）と大幅に上昇した。

交雑種

交雑種の子牛取引価格は、23年度以降は取引頭数の増加により低下傾向で推移していたが、25年度は取引頭数の減少により上昇に転じ、26年度は1頭当たり32万5000円（同9.6%高）と上昇し、27年度も同38万5000円（同18.5%高）と大幅に上昇した。

図11 肉用子牛の市場取引価格と黒毛和種取引頭数

